

<研究成果の紹介>

## 少加温施設栽培「不知火」安定生産のための適正葉果比

紀南かんきつセンター

### 1. 成果の内容

「不知火」は近年全国的に栽培面積および生産量が急増し、果実品質が優良であることから市場における人気が高い中晩生カンキツです。露地栽培はもとより、施設栽培の取り組みも各地で盛んに行われていますが、樹勢がやや弱い等、解決しなければならない栽培上の問題点がいくつかある品種です。

その中でも、高品質果実を連年安定結実させるためには、どの時期にどのような葉果比に設定するかという基準が必要で、重要な問題とされています。

本試験では、少加温栽培の高接ぎ3年目の「不知火」を用いて、適正葉果比の検討をしました。生理落果終了後、一旦葉果比70枚に設定し、約3週間後に葉果比80枚、100枚、120枚に設定しました。その結果、果実肥大は葉果比が大きいほど旺盛になりました。収量は葉果比が小さいほど多くなり、果実は葉果比が大きいほど大玉となりました(表)。収穫果実の階級割合は、葉果比80枚では小玉が多くなり、120枚では大玉が多くなりました(図)。

収穫果実の品質は、葉果比の違いによる差はありませんでした。従って、生理落果終了後に、葉果比100枚程度に摘果することにより、適正な果実階級割合で、収量をあげることができると思われます。

### 2. 技術の適用効果と適用範囲

少加温施設栽培の「不知火」における葉果比設定の基準となります。商品価値が高いといわれている2L・3L果実を、高い割合で生産することができ、経営安定につながると考えられます。

### 3. 普及・利用上の留意点

少加温施設栽培における結果であり、露地栽培については別の基準が必要です。「不知火」は、地下部への養分の配分が少ない品種といわれており、着果負担をかけすぎると、根の量が減って極端に樹勢が弱くなってしまいます。樹勢に応じた着果負担を見極め、それぞれの樹体に適正な葉果比を設定することが大切です。

(かんきつ担当 鈴木 賢)

表 葉果比の違いが収量に及ぼす影響

葉果比	収量(kg/樹)	果実重(g)
80枚	60.5	293.7
100枚	56.8	339.0
120枚	38.3	379.5

